

特 71

555

軍歌

301175-000-1

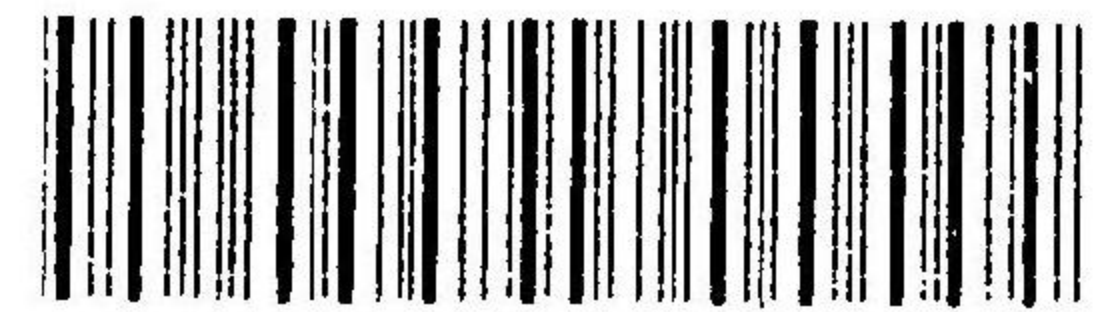
特 71-555

軍歌

寿盛堂

M22. 4

CEH-0017



特 71
555



77W13830

喇叭吹奏歌

第一號 ○君が代

天皇及太皇太后皇后皇太子
太子妃皇族に對し敬禮を表
するときに用ゆ

君が代ハ 千世に八千世に
いはほとまりて ことびのむすまで
さいれ石の

第二號 ○海ゆかば

將官及相當官並に將官の職
を奉する大佐に對し敬禮を
表するときに用ゆ

海ゆかば みつりかはね やまゆかば
くさむすかはね ふほ君のへにころしなめ
のどにばしなし

第三號 ○皇御國

皇御國の武士

軍隊相逢ふ時に用ゆ
いかまる事をか勉む

唯身にもてる誠心を

第四號 ○國の鎮め

國の鎮めのみやしちと

けふの祭りの賑ひを

治まる御代を守りませ

第五號 ○命をすて、

命を捨て大丈夫が

在べき限り語りつき

絶えずつきじ萬世も

第二百十五號 ○扶桑歌

わが天皇の治めしる

やは萬世も動かぬぞ

治め玉へばとことばに

わが天君に盡すまで

靖國神社参拜等に用ゆ

いつきまつろふ神靈

天かけりてもみろをばせ

一般葬禮の時に用ゆ

たてし功績は天地の

いひつきゆかむ後の世に

分列式の時に用ゆ

わが日本は萬世も

神の御世より神をがら

動かぬ御代を變らぬぞ

四方に輝く御稜威は

斯るめでたき我國に

天皇か恵に報いんと

盡せよや人力をも

第二百十八號 ○あらき

あらしいはねをふみさくみ

武士の身の常すかし

いむかふ敵はむけあへつ

御心休めまいらせむ

第二百十九號 ○おほ君

いさを尊としまつろはぬ

ひとをやはしてたひらけく

月日の如く照すあり

やよ國民よ朝夕に

心を合せひたふるに

合せて盡せ人々よ

第二百十八號 ○あらき

あらしいはね登坂の時に用ゆ

峻しき坂を越えゆくも

習せや慣る君がため

販りつ早く我君の

急げや急げ御軍よ

第二百十九號 ○おほ君

いさを尊としまつろはぬ

かへるれもへは大君の

みいつかじこし御軍の
うのいさをはや

功績貴としろのみいつはや

第二百二十號

○ふきあす笛の途上に用ゆ

ふきあす笛のうの音も
もの哀をしり顔に
千百萬の敵軍も
あもへる我等か袖までも

捧る旗のうの色も
けふはものこり哀しけれ
とりて來ぬべき勇らをと
涙の雨にぬれにけり
號中に非ずといへども

○軍歌 第一

來れや來れいざ來れ
寄せ來る敵は多くとも
死すとも退く事勿れ

御國を守れや諸共に
忍るゝ勿れ忍るゝを
御國の爲あり君のため

○第二

進めや進めいざ進め
劍は林を爲すとても
死すとも退くこと勿れ

彈は霞と飛ひ來るも
ためらふ事なく進み行け
御國の爲あり君のため

○第三

勇めや勇め皆勇め
御國を守る兵士は
死すとも退く事勿れ

劍も彈もあんのうの
身は鐵よりも猶堅く
御國の爲めあり君のため

○第四

勉めよ勉め皆共に
汚せしものち後の世に
死すとも退く事勿れ

汚し事をき國の名を
言れぬやうに覺悟して
御國の爲めあり君のため

○第五

五

懐へよ懐へ能く懐ひ
我身の失せざる其中は
死すとも退く事勿れ

○第六

守れや守れ皆守れ
恐るゝものは父母の
死すとも退く事勿れ

○第七

恐るゝ勿れ恐るゝを
國をば愛する兵ものに
死すとも退く事勿れ

○第八

いゝもやすゝめ皆すゝも

神より受けたる此國は
人手に決じて渡さずと
御國の爲めあり君のため

異國の奴隸と成るとを
墳墓の國をば能く守れ
御國の爲めあり君のため

民をば愛する我君と
勝つべきものは世に非ず
御國の爲めあり君のため

腐りし心のなきものは

命を惜まず進み行け
死すとも退く事勿れ

○第九

進めやすゝめ皆すゝめ
すゝめやすゝめ皆すゝめ
死すとも退く事勿れ

○第一

吾れは官軍我敵は
敵の大將たるものは
是れに從ふ兵は
鬼神に耻ぬ勇あるも
起せし者は昔より
敵の亡ふる夫れ迄は

御國の旗を押立て
御國の爲めあり君のため

御國の旗を押立て
祖先の國を守りつゝ
御國の爲めあり君のため

天地容れざる朝敵を
古今無双の英雄を
共に慄悍決死の士
天の許さぬ叛逆を
築きたためし非るさか
すゝめやすゝめ諸共に

玉散る 劍拔き連れて

死する覺悟で進むべし

○第二

皇國の風と武士は
維新以來廢れたる
亦世に出る身の譽れ
刃の下に死ぬべきに
死す可き時は今あるぞ
敵の亡ぶる夫れ迄は
玉散る劍拔き連れて

其身を守る魂の
日本刀の今更に
敵も味方も諸共に
日本魂あるものは
人に後れて耻かくる
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

○第三

前を望めば劍あり
劍の山に登るのは
此の世に於て山のあたり

右も左も皆劍
未來の事を聞きつるに
山の山に登るのも

我身のあせる罪業を
賊を征伐するが爲め
敵の亡ぶる夫れ迄は
玉散る劍拔き連れて

滅す爲めに非らずして
劍の山も何の爲の
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

○第四

四方に打出す砲聲は
敵の刃に伏す者や
絶て果かなく死する身の
其血は流れて川をあす
敵の亡ぶる夫れ迄は
玉散る劍拔き連れて

雲間に見ゆる電か
天に轟く雷か
丸に砕けて魂のをの
屍は積みみて山をあし
死地に入の君の爲め
進めや進め諸共に
死する覺悟で進むべし

○第五

彈丸雨飛の間にも
すゝむ我が身は野嵐に
果加なき最後を透ぐる共
死して甲斐ある者あれば
我と思はん人達は
敵の亡ふる夫迄は
玉徹る劔抜き連れて

○第六

我れ今此に死あん身は
捨つべき者は命あり
忠義の爲めに死する身の
永く傳へて残らん
義もなき犬と言はるゝあ

二つ無き身を惜まずに
吹かれて消ゆる白露の
忠義の爲めに死する身の
死するも更に恨なき
一歩も後へ引あかれ
進めやすゝめ諸共に
死する覚悟ですゝべし

君の爲めあり國の爲め
縦令屍は朽るとも
名は芳はしく後の世に
武士と生れた甲斐もあ
卑怯者すと謗れあ

敵の亡ふる夫迄は
玉徹る劔抜き連れて

行軍歌

我が日本の國體は
神の御國と稱へきて
遠き名びすが國までも
射すや草葉の露程り
類も少なき結環の
守るは誰の職務や
五つのは訓戒銘肝して
多衆か人の其中に
厚き仁恵は駿河なる
伊勢の海すら舟は

すゝめやすゝめ諸共に
死する覚悟で進む可し

故き神代の頃より
五百海坂隔てたる
光輝く旭子の
傳り受けし例めした
誠實ある身を甘美にも
衆のあひたも忘るまよ
腕み御指と抜擢れて
不二の高嶺も尙は低く
其の皇に若しや又

敵をす我夷有もせは
討ち夷びて大君の

御心慰め奉れ臥

彈丸は敵と空に飛ひ
雷の響も砲聲に
我魂の緒も打絶はん
進むに猛き武士は
屍は野邊に曝すとも
櫻と句ふ九段坂も
祭り納めにし諸靈は
冠あり戎夷盡るまで
何為厭はん敷島
堅固き金剛の

剣は野邊の電か
吹き來る風も腥く
今時の時予勇壯しく
躑躅ふ事は何のろの
名は后世に醜都しく
空に聳ゆる靖國の
是大丈夫の龜鑑るへ
假令や火の中水のうて
倭魂飽くまでも
石より光輝灼々は

人皆あべて羨慕す
古郷人に品格高く
二千五百年以來
の國守る軍人よ

青白あせる桐の意
錦繡を飾る心氣よき

地球の上に輝かせ
いがある敵をも打拂へ
我大君の御標

君の御言をかしてみて
思と勇とに此旗を
地球の上に輝かせ

登る旭ともろとも
汝を援け玉ふべし
此八洲國の内あらで

代々の皇の神々は
汝の功を立る場は
外つ國々に在とられ

○第二

○第一

神后皇后 豊太閤 此旗を

○第三

四方海ある日本國

未頼母敷金城は

翼さ猛しき鷲迎も

我皇國に寇を爲す

雷ちあせる大砲と

いかある敵をも打拂へ

地球の上に輝かせ

皇國の軍人か

昔は弓矢鎗刀

地球の功績想べし

砲臺よりも艦よりも

汝等忠義の軍人か

爪牙鋭き獅子迎も

兇者共の在るあらば

電光あざむく劍をもて

思と勇と此旗を

用ゆる利器は何物ぞ

今は銃砲軍艦ま

大和魂ある人の

驚をも獅子をも打拂へ

いかある敵をも打拂へ

國の光りを建る旗

冠を平け民を撫て

功績譽めて諸人が

榮譽て限あかるべし

國の光りと此旗と

萬世不朽の帝國の

御稜威は世界に響くらん

我日本は千五百代も

汝の帯べる銃劍は

○第一

我大君の御標と

益す光り輝きて

吾人陸海軍人の

祝ひ唱ひて悦ひて

烈しき戦すみし時

益す光り輝きて

御稜威は世界に響くらん

天皇尊の統御しる

○扶桑歌

一代の如く神をがら
 猛く雄々しき平らけく
 其大神稜威朝さ宵いに
 仕へ奉ふ人民は
 一つ心に集めへて
 然れ社る世に我國を
 ○復古の歌
 王政復古のうのかみを
 三とせの冬の十二月
 みやこの空にたちかへる
 世はかりごとも亂れつゝ
 駿馬にひらくときの際
 星のくちらぬも三臺の

治め給へは大御威
 穩かに安く在りとかや
 あやに畏み安國と
 彌や増す増すに真心の
 我日本を護りけり
 浦安國と稱へたれ
 かもへば凄じ慶應の
 九日の日をはじめにて
 春のひかりもぬばたまの
 とやめもわかぬすみずめの
 よろひの袖にかゝやくや
 影うすれゆくさしぐしの

あかつき暗き鳥羽伏見
 錦きの御旗ひるがへし
 勇氣いやますますらをか
 轟きわたる修羅の道
 ちしをにらむるもみぢばの
 仆れかさなるしかばねは
 踏んだぎゆく戦場の
 翳すつるぎつかの間も
 道のはてころきはれあれ
 災さかまく淀の城
 煙のすへのかげふるも
 のどけき春にうちまよぬ
 かたりつゝ胸をかつぎに

大内山のやまかせに
 大將軍のいぞまじに
 いくさよはぬもいかづちと
 斬りつ斬られつ阿毘叫喚
 赤きこゝろをとりどりに
 敵か味方が彼は誰れ時
 習ひ常あさつゆの身と
 君をわすれぬものよの
 天地もうごく震動に
 かほへる雲のたちまちに
 きえて治る君がよの
 むかしかたりとすさし世を
 老たるかげもかつ見ゆる

このうたげこそ樂しけれ

○カンプベル氏英國海軍の歌 ○第一

一千年のろの間
戦争のみか嵐をも
敵を受くともたゆみなく
軍烈しくあらばあれ

○第二

立ちくる海の浪間より
汝を援けたまふべし
其甲板はてがらの場
大テリスやプレミの
軍烈しくあらばあれ

固く守れる水兵は
汝が建つる大旗は
支へ得たれば此後も
勇氣のしりひるがへせ
嵐も強く吹けば吹け

汝が祖先あらわれて
蓋し祖先の軍艦の
大海原は其墓場
死にし處は人しのお
嵐も強く吹かば吹け

四方海あるブリタニヤ
山とたちくる波とても
慣て我家に異あらす
船より放ちといろかし
軍烈しくあらばあれ

○第四

國の光とれてし旗
危難も都て解け去りて
其時汝つはもの
歌に唱ひて悦びて
烈しき軍すみし時

○テニソン氏輕騎隊進撃の歌 ○第一

とりでも城も用はなし
千尋のうこの淵とても
いかづちあせる大砲を
波をわけつゝすみゆく
嵐も強く吹かば吹け

益々光り輝きて
太平の日にもぞらん
いさほし譽て諸人が
安樂限りあかるらん
強き嵐のやみし時

一里半あり一里半
死地に乗り入る六百騎
士卒たる身の身を以て
答をあすも分あらず
死ぬるの外はあらざらん

○第二

右を望めば大筒が
共に打出す砲聲は
響の如く凄まじや
猛り立てず進みあり
勇で乗り入る六百騎

○第三

扱ば玉ちるやへばをば

并びて進む一里半
將は掛れの令下す
譯を糾は分あらず
これ命これに従ひて
死地に乗り入る六百騎

前も左りも又筒が
天に轟くいかづちの
彈丸雨飛の間に
死地に入れ鶴の口
留もろ共に飯あびて

きらく／＼と輝けり
大砲方をあて切り
煙の中に飛込みて
太刀の早業見事あり
遂にさふる事あらず
馬の頭が立直す
残るはいといわづかあり

○第四

右を望めば大筒が
共に打出す砲聲は
彈丸雨飛の其中に
死地より出て乗りかへす
歸るは元の一里半

敵陣近く乗り掛けり
辰と目冷しき働さず
烈しく陣を破るあり
敵の軍勢たぢく／＼と
むらく／＼とむらくづれ
以前に進みし六百騎

左りも後も又筒が
天にといろくいかづちが
縦横むじんに切り靡く
わにの口より脱れ出で
六百人の其中に

變るはいとわづかまり

○第五

あゝ勇まじきものゝふの
手柄は永く傳へあん
とる年あまた重りて
頭くわだに霜しもを戴いたきて
六百人ひやくにんの豪傑ごうけつが
うのふる事を語ろふて
建武けんぶの昔むかし正成せいせいは
是これは一歳いっさい都攻みやとせめの有ありし時
之これを汝なんぢに讓ゆづるあり
世よは尊氏たかうぢの世とありて

よきかんばしき其譽そのほまれ
今いまのおさあむ生立ちて
腰こしは梓あじの弓ゆみとあり
孫まごひてやしやと多おほき時とき
敵てきの陣ぢんへと乗り入いれる
未ま代だいまでも名なは朽くちじ
○楠正成櫻井驛に於て正行へ遺訓の歌
肌はだの守まもりを取とり出いし
下したし給たまひし綸旨りんしあり
我われ兎とに角かくにあるまらば
敵てき慮りを惱なやし奉たてらはんは

鏡かがみにかけて見る如ごとし
父ちちの子こあれば流石りやうせきにも
弓ゆみ張はり月の影かげ暗くらく
打うち漏もらされし郎等らうとうを
吉きちの山やまの奥おく深ふかく
流ながれも清きよき菊きく水みづの
敵てきを千里せんりに退しりぞけ
嗚呼あゝ敵慮てきりよを安んじ奉たてれ

○小楠公を詠ずるの歌

嗚呼あゝ正成せいせいよ正成せいせいよ
黒雲くろぐも四方しやうほうにふさがりて
惡魔あくまは天下てんかを横行やうぎやうし
あまをり果はて上かみとせず

さは去さり乍あたらち正行せいぎやうよ
忠義ちゆうぎの道みちはかねて知しる
家名けなを汚けがすこと勿なれ
あわれみ扶助ふたすけし隱家かくれがの
月つきの桂かつらは渾さいや
旗はたを再またびひるがへし
敵てき慮りを慰なぐさめ奉たてれ
公こうの逝去せいぎのこのかたは
月日つきひも爲なめに光ひかりあり
下したを虐しへげ上かみをさへ
吹ふき來くる風かぜはあまぐさく

絶る間のなき人馬の音
 芳野の山に花見んと
 君が御代ころ千代くと
 いずれの時にあるあるや
 嗚呼大君の御為に
 この世の塵を拂はんぞ
 遠くあまたを見わたせば
 雲の上まで屹立し
 見ゆる菊水の其旗は
 父の賜ひらこの刃
 賊の頭らを斬せむ為
 國の仇あり父のあだ
 拂へば來たる夏のはい

春は來れども花さかず
 訪ひ來る人は絶てなく
 囀る鳥の聲聞は
 ちげかおじぎの至りなり
 振ひ起りてけがれたる
 する人としてあらざるか
 金剛山は魏賊として
 繁る林の木の間より
 實にこゝ國の寶あり
 腹をされとの為ならず
 にくともにくし彼の賊等
 斬て捨すに置べきか
 頃は正平戊子の春

熟ら思ひゆぐらさば
 若しも病に罹されて
 不孝と誹られぬ
 死出のなごりに今一度
 君の御影を伏し拜み
 聞て切なる胸のもち
 書き残したる梓弓
 誓ひし者は百餘人
 ものともせず斬まくり
 討死せしはいさぎよく
 御も遠き村里の
 忠臣子孝の鑑ぶと
 天地と共に傳はらん

元來よおき此からだ
 空しく失せし事あらば
 討死するは此時が
 かなへて親面たり
 至て歸れのみことのり
 哀れといふも思なり
 引きてかへらぬ赤心を
 雲霞の如き大軍を
 君の方をば枕して
 いさましかりける次第なり
 女はらべに至るまで
 譽る其名は香しく
 天地と共に傳はらん

○詠史

武士の礎としもたへつゝ
 やまと心のくもりなく
 あかさか山にたてこもり
 かるしの風にかたぎらば
 散行きにけりかの本の
 又引かへし攻め來れば
 心極めて櫻井の
 子に教つゝのこしあさ
 うちしたがあへて湊川
 りし事もあわとあり
 てかくろと空に満つ
 と散てし隣れさを

其名かれせぬ楠の木
 君につかへて國のため
 あるは千早に吹をろす
 たまりもあへずちりく
 いやつきしきにうちよせて
 今をかぎり死なばやと
 里にかほれる言の葉を
 其身はやがてつはものを
 うてをふかみて赤心に
 消て戦の敗れると
 倭心は三吉の
 早くも此の傳へ聞く

暫時まごろむ夢をさへ
 心をつぎて君がため
 家に傳へしみたらしの
 いるてふ事を記し置
 實にたぐひなき丈夫の
 國を枕になしてける
 傳へ聞ふだに身もさぶく

○日本魂

日本魂其は何ぞ
 外國人の侮を
 是れ日本心なる
 日本魂其は何ぞ
 人迎も諸共に

驚かなんとむらさきもの
 盡す心はたゆみなく
 梓の弓のなきかすに
 吉の山のかほれるも
 親子はらからのとらずも
 赤き心を今も世に
 なりにけるかなあわれ丈夫

八多部良吉

寄せ來る敵を打拂へ
 夢にも受るとはなし
 是れ日本心なる
 筑紫の端や陸奥の
 偏へに盡す國の翁

是る日本魂其は心なる
 如何なることの有る迎も
 是る日本魂其は心なる
 力の有る限りよは
 是る日本魂其は心なる
 日本無學の跡を絶ち
 是る日本魂其は心なる
 家の富めるも貧しきも
 是る日本魂其は心なる

是る日本魂其は心なる
 割れば亡び合へば立つ
 心合して割れざらむ
 是る日本魂其は心なる
 人々々々勉め怠らず
 國を開きて利を興と
 是る日本魂其は心なる
 學びの道を盛んにし
 智識を以て名を揚る
 是る日本魂其は心なる
 尊き人も卑人も
 相親しみて備なし
 是る日本魂其は心なる

日本魂其は心なる
 道ある者と交るに
 是る日本魂其は心なる
 日本魂其は心なる
 信を盡す其の爲に
 是る日本魂其は心なる
 日本魂其は心なる
 正しき道の及にて
 是る日本魂其は心なる
 日本魂其は心なる
 慈悲の心を擴ろめ
 是る日本魂其は心なる

是る日本魂其は心なる
 外國人を侮らす
 我と是との隔てなし
 是る日本魂其は心なる
 忠義心を堅く取り
 身をば棄てゝも動かじよ
 是る日本魂其は心なる
 弱を扶けて強を擊ち
 無理非道をば亡ぼさむ
 是る日本魂其は心なる
 幸なき者を憐みて
 禽獸にまで及ぼされ
 是る日本魂其は心なる

明治二十二年四月十八日印刷
明治二十二年同月十九日出版

發行者 京橋區銀坐二丁目十番地 三浦伊七

印刷者 日本橋區新右衛門町十番地 田宗七

發兌元 京橋區銀坐二丁目十番地 壽盛堂

○唱歌手引冊 全一冊 以上三種の書籍は各學校生徒の

○唱歌之友 全一冊 最も箴灸する唱歌數十章を録し

○唱歌の學 全一冊 借名の説き明し等を記したる唱

歌の指南なり遠近各地の令童

貴女偏へは愛顧の榮を祈る

国立国会図書館